

555 前壁心筋梗塞の回復期運動療法と左室リモデリング —運動負荷Tl心筋SPECTによる検討—
永島淳一、千葉一夫（都多摩老人医療センター 核放）
橋本 通、中山雅文、東 祐圭（昭大 藤が丘リハ循内）
長谷部 伸、新尾泰男、国安芳夫（昭大 藤が丘 放）

心筋梗塞後回復期運動療法の左室リモデリングに及ぼす影響を運動負荷Tl心筋SPECTを用いて検討した。

急性前壁心筋梗塞15例（平均年齢59歳、男のみ）に8週間の回復期監視型運動療法を施行した。回復期運動療法はMETs、最大酸素摂取量の有意な延長、増加をまたExtent Scoreの改善傾向を認めた。運動療法による左室リモデリングの有意な進展は認めなかった。しかし、左室機能低下例に左室拡大傾向を認めた。左室拡大とExtent Score, Severity Scoreの間に有意な関係はなかった。また、再分布の有無も左室拡大に影響していなかった。

556 回旋枝病変における運動負荷²⁰¹Tl心筋SPECTの横断長軸像とBull's-eye像との比較

山岸 正、大鈴文孝、林 克己、高山英一、田原敬典
山内靖隆、永井知雄、中村治雄（防衛医大第1内科）
新井眞二、小須田 茂、草野正一（同放射線科）

冠動脈疾患41例で回旋枝病変における運動負荷²⁰¹Tl心筋SPECTの横断長軸像とBull's-eye像との比較を行った。対象は回旋枝、右冠動脈、又はその両方に病変を持っている症例。横断長軸像で側壁領域にカウントの低下または再分布の見られたものの感度は21/29、72%でBull's-eye像のみでの判定では16/31、52%であり、wash-out表示では16/28、57%であった。Bull's-eye像では右冠動脈と回旋枝に病変を持つ場合12/21、57%を診断できなかった。Bull's-eye像では診断が難しい回旋枝において横断長軸像での側壁部の所見は診断率を上げるのに有用であると考えられた。

557 タリウム運動負荷心筋スキャンにて再分布を認めた症例での安静時の脂肪酸心筋スキャンの検討
多田 明（国立金沢病院、放）

タリウム運動負荷心筋スキャンにて一過性の虚血と再分布を認め、3週間以内に安静時の脂肪酸心筋スキャンが行なわれた18例を検討した。心筋SPECT像で9つに分割した各局所を0から3までのスコアで評価した。局所のスコアの一致率は負荷直後像では54.9%、後期像では60.5%であった。病変の検出率では安静時の脂肪酸スキャンでも全例で異常が検出された。心筋の総スコアの比較では、脂肪酸スキャンのスコアが負荷直後像よりも大きな例が7/18、39%であった。後期像との比較では15/18、83%の例で脂肪酸スキャンの所見が勝っていた。ある程度の期間虚血にさらされていた狭心症症例では安静時の脂肪酸スキャンでも病変の検出が可能ではないかと考えた。

558 I-123-BMIPPを使用した軽労作負荷心筋シンチグラフィの検討

植原敏男、両角隆一*、山上英利*、福地一樹、楠岡英雄、西村恒彦（阪大医放射線部/トレーサ、1内科*、放科*）

I-123-BMIPPは心筋脂肪酸代謝評価に有用とされている。虚血心において運動負荷を施行した際、正常心筋では脂肪酸代謝は亢進するが虚血心筋においては早期に糖代謝に変換するため、心筋虚血部と正常部ではBMIPPの集積に差異が生じると考えられる。そこで軽労作負荷BMIPP心筋シンチを施行し、Tl-201運動負荷心筋シンチと心筋虚血の検出について比較した。対象は虚血性心疾患10例である。この結果、BMIPP軽労作運動負荷はTl-201運動負荷心筋シンチと同等の欠損が得られたもの6例、程度の強い欠損が得られたもの3例、逆に欠損が軽いもの1例であった。本法は軽度冠動脈病変を有するもの以外は心筋虚血の検出に鋭敏と考えられた。

559 虚血性心疾患における負荷BMIPP SPECTの有用性
細井宏益、山崎純一、山科久代、石黒 聡、方 眞美、五十嵐正樹、飯田美保子、森下 健（東邦大一内）

負荷BMIPP(BM) SPECTの心筋虚血ならびにviability評価における有用性を検討した。虚血性心疾患17例(OMI8例、OMI+AP2例、AP7例)に運動負荷またはdipyridamole負荷を施行し、BM、Tlの2核種同時投与、dual modelにて撮像し、評価は視覚的に行った。Tlの再分布とBMのfill inの比較では、Tl、BMともに17例中10例に再分布あるいはfill inを認め、うち7例においては、ほぼ一致した所見が得られた。欠損範囲の比較では、初期像においてTlの欠損域がより広範であったもの4例、BMが広範であったもの5例、ほぼ同等であったもの7例であった。遅延像においても同様の結果が得られた。初期像、遅延像ともに所見の一致をみたものは4例であった。負荷BM単独で心筋虚血を評価し得る可能性が示唆された。

560 Dipyridamole負荷心筋BMIPP所見の検討
分校久志、森 清男、利波紀久、久田欣一

（金沢大 医療情報、同核医学、辰口芳珠記念 内科）

虚血性心疾患(IHD)におけるDipyridamole(D)負荷心筋¹²³I-BMIPP SPECTの意義について²⁰¹Tl、CAGと対比検討した。対象はD負荷BMIPPを施行したIHD22例(男17、女5、平均年齢69才)である。BMIPPは安静空腹時に投与し20分、3時間後に撮像した。Bull's eyeの洗い出し(WO)は37~39%/3Hrで多枝病変および女性でわずかに高い傾向であったが有意差はなく、TlのWOとも相関はみられなかった。Tlとの視覚的対比では欠損がより明瞭なものは非梗塞(AP)例で18%、梗塞(MI)で71%であり、より軽度のはAPで64%、MI例で0%であった。欠損の明瞭性と血管病変数は一定の傾向がみられなかった。BMIPPの再分布例では欠損がTlより軽度のものが半数で、逆再分布例では2例全例がより明瞭であった。APではD負荷の必要性は少ないと考えられた。